

明治期における私立女学校、高等女学校 の体育の指導者について

掛 水 通 子

はじめに

明治35年12月に私立東京女子体操音楽学校の第1期生が卒業し、わが国初の体育を専門に修めた女教師が誕生した。その後、日本体育会体操学校女子部と女子高等師範学校国語体操専修科の卒業生がこれに続いた¹⁾。

岸野²⁾は、日本の女教師によって高等女学校で体育が指導されるのは明治30年代の後半であり、それまで日本の大部分の女学生は男子教員によって指導され、体育を女教師の手で指導したものはミッションスクールの外人女教師に限られていたことを指摘し、ミッションスクールの外人女教師とその体育について報告している。秦³⁾もミッションスクールの体育と身体観について報告している。

本稿では明治期において女学校、高等女学校の体育の指導者は誰であったのか、明治35年を境にその動向に違いがあるのか、日本人女教師による指導の始まりはいつか、「女子体育は女子の手で」は明治期においてどの程度浸透していたのかについてを、上記のミッションスクールを含めて私立学校について考察したい。官公立、および大正以降については別稿に譲る。本研究では、各学校史および各学校に対する調査から得られた史料の範囲内で考察する。

1. 明治35年以前の指導者

(1) 外人女教師

明治3年9月に開校したフェリス女学校にはじまり、ミッションスクールは女学校が大部分を占めていた。これらの学校で体育が指導される場合は少なく、指導された場合でも正課体育としてではなく、食事前、就寝前等での実施が多かったが、プロテスタントキリスト教主義女学校を中心に外人女教師により体育が指導されはじめた。

フェリス女学校(米国リフォームド派外国伝道局設立)では、明治14年から19年までミス・スイ・エス・バラが英学、音楽との兼任で「遊戯式をオルガンに合わせて⁴⁾」指導し、ミス・アンナ・デ・エフ・タムソンは明治20年から明治末年まで地理、歴史、英語、音楽との兼任で指導した。明治21年から26年まではミス・デヨが倫理との兼任で「朝食前6時ごろ深呼吸をはじめ新式表情体操のデルサート⁵⁾」を教えたのである。

立教女学院(明治10年9月米国聖公会伝道会社設立)では、明治18年にページ夫人が「柔軟体操」を教え、明治20年の学芸会ではガーディナー夫人が「美容(柔軟)体操」を演技し、ふ

だんの時も生徒に指導した⁶⁾。

活水女学校(明治12年12月米国メソジスト教会婦人伝道会社設立)ではマリアナ・ヤング校長が明治30年から大正8年まで、英語と共に体操を教え、明治35年には「新式体操」が有料公開された⁷⁾。

ブリテン女学校(明治13年10月米国メソジスト教会婦人部設立,成美学園)では、明治30年代に、「夕方1日の課業を終えると先生も一緒に狭い運動場をかけ廻る、学習ではいかめしいミス・ハジスも黒い『校長ドレス』をひるがえして生徒とたわむれた⁸⁾」のである。

東洋英和女学校(明治17年11月カナダ・メソジスト教会婦人伝道会社設立)でも明治30年代にミス・ブラックモアが「ワン,ツー,スリーでダンスの手ほどきみたいなもの⁹⁾」を教えた。

福岡英和女学校(明治18年5月米国メソジスト監督教会婦人伝道会社設立,福岡女学院)では創立当初から、7時の朝食前に「ギール先生が体操の先生となって寄宿舍全体のもの,七十近くの笠城先生のお婆さんまで『ワン・ツー・スリー』で体操いたします¹⁰⁾」と、校長先生が体操の先生となり70歳近い手芸教師まで寮で体操をした。30年代になっても外人女教師により「マッサージ体操」を指導された¹¹⁾。

金沢女学校(明治18年9月設立,北陸学院)では「ヘッセル先生が開校早々、米国有志の賛助を得て、新式の器具を取りよせ、唱歌の時間はオルガンを用い体操時には棍棒を振り、校庭で棍棒体操をしていると門前には市民が黒山のようにたかって見ていたとの事である¹²⁾」と、外人女教師による棍棒体操は市民には珍しかった。放課後30分間の寄宿生の運動時間に庭や運動場に出ない者は「Take Exercise girls という声と共につまみ出されました¹³⁾」と、積極的に運動の機会が与えられた。

函館聖保禄女学校(明治19年1月シャルトル聖パウロ修道女会設立,函館白百合学園)では明治30年代の運動会では修道女の指導によるダンスが演ぜられ多くの見物人が集まっている¹⁴⁾。

頌栄女学校(明治19年9月岡見清致設立)開校時の教員任用願には英学,唱歌,体操の担当にC. T. アレクサンダーとA. B. ウェストの2人の女教師の名が見られ、明治20年代末にはミス・リードが「女にも運動が必要だ」と、クリケットを教えている¹⁵⁾。

フレンド女学校(明治20年10月米国フィラデルフィア友会派設立)に明治25年にきたミス・ピケットも生徒の和服による姿勢の悪さを矯正するため手本を示して体操を指導した。

以上の例にみられるように、明治10年代中ごろから、校長あるいは他教科兼任の米国人を中心とする外人女教師によって体育が指導された。各種の運動が指導され、彼女ら自らも生徒と共に運動し女子にも体育が必要なことを啓蒙していった。20年代,30年代にも指導は続けられた。しかし一般の人々にとってはまだ、珍しいもので見物の対象となり有料公開されたりしたのであった。

(2) 日本人女教師

キリスト教に依らない女学校で体育が行われているのは稀であり、体育指導者の記録を導き出す事は難しい。そうしたなかで、明治8年11月に跡見女学校を開校した跡見花蹊は、当初から「運動踊」を実施したのである。明治9年に入学した三宅花圃は遺稿で花蹊について、「体育に気をとめられ、まだ体操といふ事もなく、教師もないものですから、運動法,姿勢を矯正

する法を考えて舞踊を奨励されました。その舞踊は実に高雅なもので、お塾の人達は一人残らずなさねばならず、子供達のこととて僅か三十分計のことを面倒がって出ないものは叱られました」と書いている。この「運動踊」は宮中女官達のお盆のあらさ踊りから形を取った舞踊であり花謡の作った歌に合わせて、夕食後の30分間踊ったものである。活発な運動にも不便でなく、女子としての容儀を損なわない服装として宮中女官の服装からの袴¹⁶⁾を穿いて踊った。明治15年には文部省視学辻新次が来観し、「優美にして女子にふさわしい運動なり¹⁷⁾」と奨励したということである。女性校長による運動の奨励として注目してよいであろう。

明治10年代末にはミッションスクールの中に日本人女教師が体操を指導する学校が現われた。高等科在学中から助教師を勤めていたフェリス女学校高等科明治17年卒業の坂従安子は、母校で明治18年から明治21年まで英語と地理との兼任で体操を指導したのである。続いて明治23年に高等科を卒業した平野浜子は同年から日本女子大学校へ転じた明治34年まで在職し和漢学、女礼と共に体操を指導したのである¹⁸⁾。これらは外人女教師から学んだことを指導したのであるが、日本人女教師による新しい試みであった。

梅花女学校（明治11年1月米国伝道会設立）では明治30年代前半には丹羽小竹が英語、地理との兼任で体操を指導し、明治32年から大正に至るまで寺田采が、同じころ澤村かずが体操を指導した記録¹⁹⁾がある。

神戸英和女学院（明治8年10月米国伝道会設立、神戸女学院）では明治13年には午後4時から1時間の運動を課していた。明治34年になって羽太レン²⁰⁾が地理との兼任で体操を指導し、専門女教師が着任する明治40年まで続いた。

尚綱女学院（明治25年11月、米国バプテスト婦人外国伝道教会設立）では、明治32年11月に私立学校令により設立認可された時から週1時間の普通体操を課し、片桐くまよが理科、国語、数学、簿記との兼任で指導した²¹⁾。

以上のように、専門女教師の誕生前から他教科との兼任で日本人女教師による指導が明治18年には始まり、30年代になってその数を増したのである。

(3) 男子教師

のちに「女子教育」を著わし日本女子大学校を設立した梅花女学校の成瀬仁蔵校長が女子体育を奨励したことは有名である。明治27年にアメリカ留学からの帰国後、女学生にバスケットボールを指導した。このころ梅花女学校では他に「主に柔軟体操、デルサート、メーポールダンス、薙刀、巫鈴体操、英語唱歌のダンス等²²⁾」が行われている。

また、明治女学校の巖本善治校長による薙刀体操の奨励もよく知られている。

平安女学院（明治8年米国聖公会伝道局設立）では、明治25年から毎日15分間の教科体育を実施し、28年には高女規程同様の学科を独自に設定していた。明治34年に田村初太郎教頭は女子体育、特に水泳を奨励し、明治34年11月の同窓会誌「望の松」第2号に次のように記している。「……従来我国の女子は、社会の風俗習慣に制せられて運動を充分に為さざりしは最も悲むべき所である。今や世運大に進み女子の身体は男子と同様に運動鍛練を認められたれば、今日的女子は此幸運を空ふせず、奮て運動を勉め健康を養ひて自己の身体を強くなし、且つ健全なる未来の国民を造らんことを切望して止まず²³⁾」と、当時の次代を担う国民を産むための女

子体育という考え方である。

跡見女学校では明治35年に遊戯体操科を設け、教科としての体操をはじめ、戸谷富太郎を聘して「兵式体操を思わせるもの²⁴⁾」を奨励し毎朝10分間実施した。

外人女教師の指導が多かったミッションスクールでも男子教師による体育の指導がみられる。頌栄女学校に明治20年に入学した生徒は、「岡見正先生から球筭体操の指導を受けた²⁵⁾」と回想している。

宮城女学校（明治19年9月米国リフォームド教会設立、宮城学院）では、明治23年2月に体操が教科に加わり、同年9月から25年6月まで、小柴忠四郎が図画、理科、歴史との兼任で体操を指導した²⁶⁾。

盛岡女学校（明治25年3月シャルトル聖パウロ修道女会設立、盛岡白百合学園）では創立当初の教科に体操がみられるが、明治30年頃の卒業生は体操、ダンスはなかったと記し、32年の卒業生は体操はないが、「遊戯でグランドチェーン、カドリール、プロミネードなどを盛んにやった²⁷⁾」と記し、34年の卒業生は、「高師出の松井先生が国語、遊戯を教えて下さいました²⁷⁾」と記している。ここでも兼任男子教師による指導が行われていたのである。

明治20年以降私立女学校にも男子教師による体育の奨励、指導が行われた。他教科との兼任による指導の場合が多かった。

2. 明治35年以降の指導者

(1) 体育教員養成機関卒業の専門女教師

明治35年12月には私立東京女子体操音楽学校（以下私立を略す）の、明治37年3月には日本体育会体操学校女子部の、明治38年3月には女高師国語体操専修科（以下女高師国体科と略す）の1期生が卒業し体育を専門に修めた女教師が誕生した。これらの卒業生のうち私立女学校、高等女学校へ職を奉じたものは非常に少なく、東京女子体操音楽学校の明治41年2月の「本校卒業生人名及奉職一覧表」によるとそれまでの341名の卒業生のうち26名であり、女高師国体科の88名の卒業生が出揃った明治44年4月において、うち5名にすぎない。また「女高師一覧」から整理すると明治期に国体科卒業生が奉職したことのある私立女学校、高等女学校は15校にすぎない。

このような状況ではあったが、それまでの教師にかわり専門女教師の活躍がみられるようになった。

跡見女学校では最初に聘したのは男子教師であったが、41年2月には東京女子体操音楽学校6期卒の長尾ふく²⁸⁾の勤務がみられる。

神戸女学院では、地理との兼任女教師に代わって、明治41年から42年には東京女子体操音楽学校8期卒業の中島キクが、明治44年から大正3年まで同7期卒の山崎仲江が勤務した²⁹⁾。

立教女学院においても外人女教師に代わり、明治41年には東京女子体操音楽学校1期卒の杉山ふく²⁸⁾の勤務がみられる。

梅花女学校においても外人女教師と並んで東京女子体操音楽学校7期卒の正木小春²⁸⁾の勤務が明治41年にみられる。

尚絅女学院では明治32年からの5教科を兼任する女教師に代わって明治39年には東京女子体操音楽学校8期卒の原田タイが着任する²¹⁾。しかし原田は41年には離任した。

明治35年以降新規に体操教師の着任の記録が見い出せる学校の中にも専門女教師の名が見られる。

大阪信愛女学院(明治17年4月幼きイエズス修道会設立)は明治41年4月に高等女学校となったのち、明治44年に女高師国体科2期卒の天野朔³⁰⁾が着任し大正7年まで勤務している。

山陽英和女学校(明治19年10月ミッションではなく日本人による設立、山陽女子)は明治31年10月に高等女学校となり、明治35年6月から37年1月までの囑託女教師による教育につづいて37年2月には東京女子体操音楽学校3期卒の森谷愛野が体操教師として着任した。しかし明治40年3月の離任後は大正12年に再び女教師の着任があるまで次々と男子教師により引き継がれた³¹⁾。

明治35年以降新たに設立された女学校にも専門女教師の着任が見られる。キリスト教によらない日本の女学校が多い。

三輪田女学校(明治35年3月設立)は、明治36年4月に高等女学校となり体操を課したが、このころから東京女子体操音楽学校1期卒の松下福枝、そののち同7期卒の石川さだか体操を指導²⁸⁾し、明治41年から43年までは東京女子体操音楽学校6期2部卒の日下ともよがであった。その後は女高師国体科の卒業生にひきつがれ、2期卒の佐藤文子(明治43年から44年)、1期卒の山田まさ子と3期卒の笠井梅子(明治44年から45年)がそれぞれ国語との兼任で体操を指導した³²⁾。

東京高等女学校(明治36年4月設立、東京女子)でも明治40年から44年まで女高師国体科2期卒の高山キク³⁰⁾が勤務している。

静岡高等女学校(明治36年4月設立、静岡精華)では当初から週3時間の普通体操、遊戯を男子教員により課していたが、明治41年になって東京女子体操音楽学校11期卒の住田あやのが唱歌との兼任で体操を明治44年まで指導した³³⁾。

東洋女学校(明治38年4月設立、東洋女子学園)には女高師国体科1期卒の柳沢てるゑが当初から着任した。明治40年9月には高等女学校になり、同年から43年までは同じく1期卒の岡崎奈美が体操を指導し、その後44年から昭和20年に至るまで東京女子体操学校15期1部卒の伊沢エイが指導した³⁴⁾。

北海女学校(明治39年4月、東本願寺設立、札幌大谷)には明治41年には東京女子体操音楽学校8期卒の石崎つきをの勤務がみられる²⁸⁾。明治42年の卒業生は、おそらく石崎についてであろうと思われるが、当時を回想して、「……最も進歩的な科目は体操と音楽でした。まだうら若い女性ながらスウェーデン式の体操服を着用し活発な動作に生徒をびっくりさせました。その先生がダンスを教えてくださいました。生徒はエビ茶や紫の袴のすそをひるがえして、音楽に合わせてヒラリヒラリと踊り廻るのです。生徒はダンスが大好きでした³⁵⁾。」と書いている。体操学校を卒業した若い女教師が体操服を着て踊っている姿が目には浮かぶようである。生徒はびっくりするがダンスは大好きだったのである。卒業したての若い専門女教師は全国でパイオニアとしての道を歩いたのである。

このように専門女教師のうち私立女学校、高等女学校への赴任は少数であったが、それまでの男子や兼任女教師や外人女教師に代わり体操を教えるようになった。明治後期に創設され高

等女学校として認可されていた女学校は当初から専門女教師を迎えた場合が多かったのである。

(2) 外人女教師

明治35年以前に比べて記録されている数は少なくなったが、外人女教師による指導は続けられている。フェリス女学校の他教科兼任のミス・タムソンは以前からひきつづき明治末年まで体操を指導した。神戸女学院では専門女教師と並んで他教科兼任のミス・ハッキングが明治41年から43年まで指導した。梅花女学校でも日本人の専門、兼任女教師と並んでミス・ラックロフは明治40年代に英語、英文学との兼任で指導し、マリオンオルチン先生はバスケットを、マカワン先生はテニスを指導した³⁶⁾。活水女学校のマリアナ・ヤング先生もひきつづき体操を指導している。

聖心女子学院（明治41年6月カトリック聖心会設立）では当初から瑞典式、その他の体操と遊戯を課したが、明治42年以降マダム・ハミネ・ウードスが英語、幼稚園との兼任で体操を指導した³⁷⁾。

これらの外人女教師は他教科と兼任で指導するものであり、大正期になってもそれはみられる。

(3) 専門以外の日本人女教師

高等教育を受けた日本人女教師が他教科と兼任、あるいは体操専任で体操を指導することが多くなった。立教女学院で明治37年から昭和3年まで体操を指導した高木みつは米国留学帰り³⁸⁾であった。梅花女学校では外人女教師、専門女教師と並んで日本女子大学校出身の正田ちやうが明治40年代から体操を指導した。

熊本女学校（明治20年5月設立、大江）で明治44年から体操を指導した広岡しな子は活水女学校専門部の卒業であった³⁹⁾。日本女子大学校附属高女（明治34年4月設立）では日本女子大学校の卒業生により指導された。明治期には明治44年からの芹澤茂、明治45年からの木内愛がそうである⁴⁰⁾。

松山女学校（明治19年9月米国伝道会設立、松山東雲）では神戸女学院卒業の他教科との兼任の女教師により指導された。明治39年から40年は数学、英語との兼任の渡部ルイ、41年から42年は修身、数学、理科との兼任の大藪シゲル、44年から45年は唱歌、英語との兼任の有田敏である⁴¹⁾。

新庄女学校（明治42年5月設立）は創立時から体操を課しており、日本女子大学校出身の豊留アサ校長が国文、数学、音楽と共に体操を担当し、河本富子も数学、図画と共に担当した⁴²⁾。

盛岡女学校に明治37年に女高師を卒業して赴任した小林いゑ子も歴史、地理、国語と共に体操を教えたのであるが、最も困ったのは体操であったと次のように記している。「一番困ったのは全級へ体操迄御命じになったのには閉口致しました。これは全く専門外の科にて、第一号令というものが出来ないのです。それで致し方なく体操の時間にはをかしげな遊戯や運動としてのバスケットボール、テニス等してお茶を濁して居りました。体操は教へる事は不得手でも私は會て女高師附属高女時代から運動家としてチャンピオンで在ったので稍もすると先生といふ事を忘れて自分でキャッキョッして終ふので困りました⁴³⁾。」というものである。わが国で

体育においても最高レベルの教育を受け、しかも運動家であったがこのような状態であるので他の場合も推して知るべしであろう。

他にも女教師により指導された学校は多く、プール女学校（明治12年英国聖公会設立）でも明治39年から42年迄伊東カメ、42年から45年迄山本彩が指導している⁴⁴⁾。北星女学校（明治20年1月北長老派教会設立）でも明治39年から42年まで聖書、数学との兼任の安孫子八重が指導した⁴⁵⁾。尚綱女学院では専門女教師の後をうけ数学、理科との兼任の大石ひでが担当した。日本橋区女学校（明治37年12月設立、日本橋女学館）でも池田つきや森田みつねの名がみられる⁴⁶⁾。福岡英和女学校でも明治36年から38年まで小川タメヲが「長い棒を持ってレフト、ライト……⁴⁷⁾」と外人女教師に習った体操を指導している。

以上のように女子高等教育機関等の卒業生が女学校や高等女学校に奉職した時、自分の専門以外に体操を指導する立場に立たされることがあった。母校での経験をもとにしての指導であったがその指導は女高師の卒業生ですらそうであったように「お茶を濁す程度」であったのであろう。しかし彼女らも専門女教師と並んで「女子体育は女子の手で」の担手であった。

(4) 男子教師

明治36年3月の高等女学校教授要目で「体操ハ成ルヘク女教員ヲシテ之ヲ教授セシムベシ」が示されたが、最初の体育担当教師として男子が着任する場合とこれまでの女教師に代わって着任する場合があった。前者としては、坪井女子工芸学校（明治36年10月設立、熊本中央女子）では明治40年以降数学との兼任の米岡基弥太が体操を指導している⁴⁸⁾。静岡高女でも創立時から明治43年まで理科、算術との兼任の八木鶴児、38年から39年までは杉浦市右衛門も体操を担当した³³⁾。私立家政女学校（明治41年4月神戸常盤会設立、神戸常盤女子）では創立当初から週2時間の体操は神戸中宮小訓導の中村先生が委嘱された⁴⁹⁾。東京高女では明治40年から大正12年まで千田民次郎が指導した⁵⁰⁾。済美高女（明治34年4月沢田裁縫伝習所として設立）で明治40年頃から大正末まで体操を指導したのは竹田直一である。12回卒業生は「（竹田先生は）大きな体格でしたが実にしなやかで魅力があり済美のダンスもまた有名で記念会の時等ステージで公開致し、いつも好評をいただいております⁵¹⁾。」と記している。男子教師によりダンスが指導されていたのである。

後者としては、山陽高女では明治40年3月に専門女教師が離任したのち、4月以降横山政太郎にひきつがれ以後6名の男子教師が大正末期まで続く。盛岡女学校では女高師出の兼任女教師ののち、明治42年以後青森師範学校卒業の藤井初太郎が体操科教員となり、44年からは地理、理科との兼任の大光寺正に代わり以後も大正9年まで男子教師が続く。北海女学校でも専門女教師に代わり、明治43年に高女となったのちは音楽と兼任の西田貞次郎が大正中期まで体操を担当した。日本女子大学校附属高女では日本女子大学校出身の女教師に明治45年から大正9年まで白井規矩郎が加わった。

このように新しく男子教師が着任する場合と女教師に代わり男子教師になる場合があり、ダンスも本格的に男子により指導されることもあった。なぜ男子教師へと代わったかは明らかにできなかった。

ま と め

外人女教師による体育の指導は明治10年代中頃からミッションスクールにみられた。明治14年からのフェリス女学校のミス・バラにはじまり、他教科との兼任で指導したり、福岡英和女学校のギール校長や活水女学校のマリアナ・ヤング校長のように、校長自ら生徒と共に実践するものであった。

日本人女教師によるものでは、校長の体育奨励として跡見花塚の明治8年からの運動踊があげられる。また、明治35年以前においても明治18年からのフェリス女学校の坂従安子、23年からの平野浜子にはじまり、梅花、神戸、尚綱などのミッションスクールには他教科と兼任で体操を指導する女教師があった。

梅花女学校の成瀬仁蔵校長や明治女学校の巖本善治校長、平安女学院の田村初太郎教頭らはそれぞれバスケットボール、薙刀、水泳を通して女子体育を奨励し、明治20年代以降男子の他教科教員による指導が少数であるがみられた。

明治35年以降体育を専門に修めた女教師が誕生するが私立に赴任する場合は少数であった。三輪田女学校等新設校に初めての体育教師として赴任する場合と、これまでの男子教師、兼任、外人女教師に代わって体操を指導する場合があった。しかし、外人女教師もひきつづき体操を指導しているし、女高師や日本女子大学校等高等教育機関出身の他教科兼任教師が体操を指導する立場に立たされることが多くなった。また新設校で最初に男子教師が指導し始める学校があり、専門女教師の手から再び男子教師の手に移る場合もあった。

したがって明治末期になっても私立女学校、高等女学校で体育を指導する者は多様であり、専門女教師による「女子体育は女子の手で」はまだ定着していなかったといえる。

本研究は昭和56年度文部省科学研究費補助金（奨励研究A）による研究の一部であることを附記する。

資料収集にあたりお世話になりました各私立高等学校の先生方に厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 掛水通子, 「明治期における女子体育教員養成機関に関する歴史的研究 — 東京女子体操音楽学校, 日本体育会体操学校女子部, 女子高等師範学校国語体操専修科の比較研究 —」, 東京女子体育大学紀要, 第16号, 1981. pp.1~12参照。
- 2) 岸野雄三, 「女子体育に尽した人たち(一)」, 子供と女子の体育, 2-5, 1960. pp.10~14. _____, 近代日本学校体育史, 東洋館, 1959. pp.42~43.
- 3) 秦 芳江, 「明治期におけるキリスト教主義学校体育が女子の体育及び身体観に与えた影響について」, 体育学研究, 10-1, 1965. p.60.
- 4) 山本秀煌, フェリス和英女学校60年史, 1931. p.62.
- 5) 山本秀煌, 前掲書, p.62.

- 6) 立教女学院, 立教女学院九十年史資料集, 1967. pp.45～47.
- 7) 活水学院, 活水75年の歩み, 1954. p.11.
- 8) 成美学園, 成美学園八十年史, 1961. p.48.
- 9) 井上健之助, 東洋英和女学院七十年誌, 1954. pp.24～25.
- 10) 福岡女学校, 福岡女学校五十年史, 1936. p.150.
- 11) 福岡女学校, 前掲書, p.157.
- 12) 北陸学院, 北陸学院八十年史, 1966. p.24.
- 13) 北陸学院, 前掲書, p.28.
- 14) 函館白百合学園, 百周年記念誌, 1978. p.25.
- 15) 辻村誠之, 頌栄七十年誌, 頌栄女子学園, 1956. p.44.
- 16) 石山基威, 跡見女学校五十年史, 1925. pp.37～44.
- 17) 藤井瑞枝, 花の下みち, 実業之日本社, 1919. p.54.
- 18) フェリス女学院 100 年史編集委員会, フェリス女学院 100 年史, 1970. p.60.
- 19) 梅花学園資料, 指導の実態は不明である。
- 20) 神戸女学院資料, 指導の実態は不明である。
- 21) 尚綱女学院七十年史編集委員会, 尚綱女学院七十年史, 1962. p.49.
- 22) 梅花高等女学校, 梅花女子専門学校, 創立六十年史, 1937. p.33.
- 23) 平安女学院, 平安女学院 100 年のあゆみ, 1975. pp.37～39.
- 24) 石山基威, 前掲書, p.123.
- 25) 辻村誠之, 前掲書, p.41.
- 26) 宮城学院七十年史編集委員会, 宮城学院七十年史, 1956. p.219.
- 27) 盛岡白百合学園, 盛岡白百合学園史, 1977. p.35.
- 28) 東京女子体操音楽学校, 明治41年2月, 本校卒業生人名及奉職一覧表による。学校史あるいは学校資料には記述がない。
- 29) 神戸女学院資料による。
- 30) 女高師一覧による。学校史には記述なし。
- 31) 山陽学園, 創立70年史, 1956. p.26.
- 32) 三輪田学園資料, 女高師一覧による。
- 33) 静岡精華高等学校資料。
- 34) 可児虎夫, 東洋女子学園六十年史, 1964. pp.13～48. および女高師一覧による。
- 35) 札幌大谷中・高校, 札幌大谷学園七十年史, 1977. p.474.
- 36) 梅花高女, 女専, 前掲書, p.121.
- 37) 聖心女子学院, 聖心女子学院創立50年史, 1958. p.24.
- 38) 立教女学院資料による。ニュージャージー州ノーマル・スクール卒。
- 39) 大江高等学校資料。
- 40) 日本女子大学資料。
- 41) 私立松山女学校, 年度末調査表。
- 42) 広島県新庄学園, 新庄学園史, 1979. p.176.

- 43) 盛岡白百合学園, 前掲書, pp.36~37.
- 44) プール学院資料。
- 45) 北星学園, 北星学園八十年誌稿, 1967. p.34.
- 46) 日本橋女学館史編集委員会, 日本橋女学館史, 1980. p.192. および同校資料。
- 47) 福岡女学校, 前掲書,
- 48) 熊本中央女子高校資料。
- 49) 長島 弘, 七十年, 学校法人玉田学園, p.9.
- 50) 東京女子学園70年史編集委員会, 東京女子学園70年史, 1973. pp.45~49.
- 51) 野本 清, 済美創立70周年記念誌, 済美高等学校, 1972. p.128.